Jo-Ann Gross & Asom Urunbaev,
The Letters of Khwāja ‘Ubayd Allāh Aḥrār
and His Associates

Brill's Inner Asian Library 5, Leiden/Boston/Köln: Brill, 2002

xx+469 pp.+59 photos+12 Pls.

久 保 一 之^{*}
 KUBO Kazuyuki

世界屈指のペルシア語写本コレクションを有する、ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所には、ティムール朝末期の著名人たちの書簡現物を集成した、他に類を見ない、きわめて貴重な写本が所蔵されている。この写本には *Majmū‘a-yi murāsālāt* (以下 MM と略記) という題名が付されているが、同時代のトルコ詩人でヘラート宮廷の有力者ナヴァーイー Nawā‘i/Amīr Nizām al-Dīn ‘Alī-Shīr (1441-1501) が編纂者と推定されることから、『ナヴァーイー・アルバム *Al‘bom Navoi*』とも呼ばれる。この写本に含まれる書簡のうち、ペルシア詩人・神秘主義思想家として有名なジャーミー Mawlānā Nūr al-Dīn ‘Abd al-Rahmān Jāmī (1414-92) の自筆書簡337通の写真版 (うち274通の露訳付き) が既に公刊されており (Urunbaev 1982), その史料としての高い価値は、国際的に広く認知されている。それゆえ本書は、何よりもまず、MM 所収書簡のうち既刊のジャーミー自筆書簡を除く、残り257通全てのペルシア語原文を発表したことによって確かな価値を持っており、専門家一同に歓迎される待望の書と言える。

二人の著者のうち、A. Urunbaev (上述東洋学研究所) はウズベキスタン・旧ソ連学界を代表するペルシア文献学者・ティムール朝史研究者であり、『ナヴァーイー・アルバム』⁽²⁾ に関して最も多くの研究業績をもつ。いま一人の著者 J. Gross (College of New Jersey) はナクシュバンディーヤ、特に本書表題にある同タリーカの著名シャイフ Khwāja ‘Ubayd Allāh Aḥrār (1404-90) (以下 Khwāja Aḥrār と略記) の研究で知られている。本書は、第1部「序論」と第2部「*Majmū‘a-yi murāsālāt*: 英訳とペルシア語原文」より成り、巻末には文献表、英文索引、ペルシア文索引、さらには MM 該当部分のファクシミリが付されている。二人の著者の分担は、Urunbaev がペルシア語原文校訂とそのロシア語訳注 (未掲載)、ペルシア文索引、序論第3章、Gross が原文とロシア語訳注に基づく英語訳注、文献表、英文索引、序論第1章と第2章の執筆を担当している (p. viii)。

* 京都大学大学院文学研究科助教授
 Associate Professor, Graduate School of Letters, Kyoto University

本書評では、MM の史料価値を重視し、この写本自体の研究成果に基づく、序論第 3 章から本書の内容を検討する。ついで、序論第 1 章、第 2 章の順に検討するが、第 2 章が MM 所収書簡に基づく研究となっているので、その内容を検討する際に、可能な限り第 2 部のペルシア語原文や英訳を参照する。したがって、第 2 部に関する評は、序論第 2 章の検討の中に含まれることになる。

I

序論第 3 章「写本とその著者たち」(pp. 57-90)

本章は Urunbaev 1982 の序論に基づくとされているが (p. viii, p. 57)、正確には、同書序論の一部 (pp. 7-29) の英訳が中心で、若干の補訂や省略が見られる。

「アルバム の 編纂」(pp. 57-60) の内容は以下のように要約できる。この希有な写本 (アルバム) は、1938 年にナヴァーイー図書館の蔵書となる前は、ブハーラーの大カーデーイー Sharifjān Makhdūm (1867-1932) が所有しており、*Majmū'a-yi murāsālāt* という題名はこの人物による。彼はこのアルバムの編纂者をナヴァーイーと考えたが、事実、多くの書簡の受取人がナヴァーイーであり、またナヴァーイー自身、その著作 *Nasā'im al-Muḥabbat* において「[Khwāja Aḥrār からの] 手紙を継ぎ合わせ⁽³⁾、製本し、枠線と装飾を施し」たと述べている。したがって MM は、遅くとも、Khwāja Aḥrār が没した 1490 年から、ナヴァーイーの上述作品が完成した 1495 年の間に、ナヴァーイーがヘラートで編纂したものと推定されるが、現在の形に整えたのは別の人物と考えられる。

「古文書学的問題」(pp. 60-64) の内容は以下の通り。写本は 29×41cm で 46 葉あり、アルバムと呼ばれることからわかるように、計 594 通のペルシア文書簡を台紙に貼り付けた形態をとっている。書簡個々のサイズは 3.7×5cm から 14.5×22cm まで様々で、一枚の台紙に、紙幅の無駄なく、可能な限り多くの書簡を貼付しようとしたらしく、書簡は様々な方向を向いている。同一書簡が二つ三つの断片に切り離されている場合もあり、いくつかの断片はいまだ特定されていない。75 通を例外として、著者の署名が施されているが、60 通を除いて、署名の部分は一旦切り取られた後に各書簡の右上隅に貼付されている。二人の署名がある場合は、二人の共著と考えられる。また、書簡本文の筆跡が署名の筆跡と異なる場合があり、著者が弟子や秘書に代筆させたと考えられる。

ここで注意したいのは、すべての書簡が著者自筆のものではなく、本文が代筆による場合もあったことで、本書の他の箇所に見られる、すべてが自筆書簡であるかのような書き方 (p. 23, p. 60, etc.) は改められるべきである。

「Ibadalla Adilov 写本の欠点」(pp. 64-65) では、1939 年に Adilov が作成した 2 冊の書写複製本の欠点や誤りを指摘する。続いて「アルバム の 研究」(pp. 65-68) では、主に⁽⁴⁾

表 MM 所収書簡の著者（ただしジャーミーを除く）

	人 名	本書中の解説（評者による要約）	書簡数 （ ）内は共著
①	‘Ubayd Allāh ibn Maḥmūd (Khwāja Aḥrār)	サマルカンドにおけるナクシュバ ンディーヤの長	128
②	Muḥammad b. Amīn al-Dīn	ヘラートかその近郊のムダッリス の可能性あり；書簡中ナヴァーイー を「息子」と呼ぶ	44
③	Mir ‘Abd al-Awwal Nishāpūrī	1500年没；ニシャーブール出身の サイド；Kh. Aḥrār の弟子・友、 娘婿，その伝記の作者	27(12)
④	Khwāja ‘Alī Tāshkandī	Kh. Aḥrār の弟子・友，娘婿，代 理人，ヘラート宮廷への使者	26(4)
⑤	Mawlānā Qāsim	1486年没；タシセント近郊出身； 約50年 Kh. Aḥrār に仕え，Kh. Aḥrār の「影」と呼ばれた	20(16)
⑥	Muḥammad Tabādkānī	1486年没；ヘラートのシャイフ； Zayn al-Dīn Khwāfi の弟子；ナ ヴァーイーと近い関係	5
⑦	Khwāja Muḥammad Yahyā’	1500年没；Kh. Aḥrār の第二子で その後継者	6
⑧	Khwāja Muḥammad ‘Abd Allāh	1500年没；Kh. Aḥrār の長子	3
⑨	Khwāja Muḥammad ibn Ḥasan ibn ‘Alā’ al-‘Aṭṭār	Bahā’ al-Dīn Naqshband の高弟 ‘Alā’ al-Dīn ‘Aṭṭār の孫	3
⑩	Abū Sa‘īd	ヘラート近郊出身； 35年間 Kh. Aḥrār に仕える	3
⑪	Sa‘d al-Dīn	不明；ジャーミーの師 Sa‘d al- Dīn Kāshgharī とする説あり	2
⑫	Muḥammad ibn ‘Abd al-Malik	ヘラートの文人	1
⑬	Muḥammad Taqī al-Dīn	サイド；Kh. Aḥrār の長子（上 記⑧の人物）の義父	1
⑭	Shaykh Ṣūfi ‘Alī	ヘラート近郊のシャイフ；Zayn al-Dīn Khwāfi の弟子	1
⑮	Muḥammad Khwāja	Kh. Aḥrār の弟子	1

旧ソ連学界における MM の研究史を概観している。Adilov による書写本完成に続いて、⁽⁵⁾1940年に A. A. Molchanov, 1948年 R. N. Nabiev, 1951年 A. A. Semionov など、ウズベキスタンを代表する東洋学者たちが、MM 所収書簡による研究成果を発表した。ロシア語・ウズベク語以外で本格的に紹介されたのは Unrunbaev & Epifanova 1967 ⁽⁶⁾が最初である。ジャーミーの書簡337通の写真版を発表した Unrunbaev 1982 は画期的な業績であり、後にその活字版がカーブル (1987年) とドゥシャンベ (1989年) で出版された。

「著者たち」(pp. 69-90) では、MM 所収書簡の著者のうち、ジャーミーを除く15名について、書簡および聖者伝・年代記等に基づいた考察が加えられている。Unrunbaev 1982 の該当部分の内容を大幅に増補しており、新たな研究成果としても重要である。ここでは、人名と簡単な解説および所収書簡数のみを表にして示す (左頁)。なお、書簡の受取人は主にナヴァーイーであるが、その主君であるティムール朝君主 Sulṭān Ḥusayn Mirzā (在位1469-1506) やジャーミーにあてたものもあるという。

ここで評者が問題としたいのは、表中②～⑮の人々と① Khwāja Aḥrār との関係である。⑦と⑧の二人は Khwāja Aḥrār の実子で、③, ④, ⑤, ⑩, ⑮の5名は弟子 (murid)、友 (ṣāhib)、代理人 (wakil) などと呼ばれ、Khwāja Aḥrār ときわめて近い関係にあり、姻戚関係も見られる。さらに、Khwāja Aḥrār との会見が確認できる⑥と、姻戚関係のある⑬の2名にも直接的な関係を見出させる。しかし、残り6名については、⑨が家系、⑭が師を通じてつながりがあるものの、Khwāja Aḥrār との直接的な交渉や関係は確認されていない。したがって、本書の表題に「Khwāja Aḥrār と彼の associates (仲間、提携者たち) の書簡」とあるのは誤解を招くと言わざるをえない。最も多くの書簡の受取人ナヴァーイーとの関係に重点をおいて、再検討すべきであろう。

序論第1章「ナクシュバンディーヤと Khwāja ‘Ubayd Allāh Aḥrār」(pp. 1-22)

本章は、最新の研究成果を踏まえた、章題事項に関する解説である。まず、カリスマ的な有力シャイフの典型とされる Khwāja Aḥrār の指導力が、東方イスラーム世界のスーフィー共同体の歴史における転換機をもたらし、ナクシュバンディーヤが、ポスト・モンゴル期のイラン・中央アジアの制度的なスーフィズムの発展を理解する上でモデルとして役立つ、と述べる。ついで、旧ソ連学界における Khwāja Aḥrār 再評価の動きや近年のスーフィズム研究の活発化を概観し、Khwāja Aḥrār とその時代の重要性を確認する。

「Khwāja Aḥrār 研究の資料」(pp. 7-9) では、Khwāja Aḥrār の死後20年以内に著された四つの聖者伝を中心に、年代記類、Khwāja Aḥrār の著作、ワクフ文書、そして MM 所収書簡を概観している。「Khwājagān の起源」(pp. 9-11) では、Khwājagān という語が、‘Abd al-Khālīq Ghijdwānī 以降 Bahā’ al-Dīn Naqshband 以前の原ナクシュバンディ

ーヤ (proto-Naqshbandiya) に用いられ、この頃は共通の修行法はなく、拠点となる施設もなかったこと、ナクシュバンディーヤには Khwāja Ahrār の系統のほか、さらに二系統あること、などが述べられている。「Khwāja Ahrār の初期の経歴」(pp. 11-14) では、Khwāja Ahrār の出身地や家系を確認した後、サマルカンドでの就学、ヘラート滞在、同時代のシャイフたちとの交流、Mawlānā Ya‘qūb Charkhī との出会い、タシュケント帰還後の農地経営などに触れ、1452年ティムール朝君主 Sulṭān Abū Sa‘īd Mīrẓā (在位1451-69) の招聘によるサマルカンド移住が転機になったと述べる。

「Khwāja Ahrār の政治的役割」(pp. 14-17) の内容は以下の通り。積極的に政治に関与するのが、ナクシュバンディーヤの伝統とされているが、シャイフとして活発に政治活動を展開したのは Khwāja Ahrār が最初である。最近の研究成果によれば、ナクシュバンディーヤの二つの原則、即ちシャリーアへの執着と「集団の中の隠棲 (khalwat dar anjuman)」がそのような活動を支え、後者は、経済活動への関与をも正当化した。ほかならぬ Khwāja Ahrār が、シャリーアが遵守された平和な社会の実現、および一般ムスリムの保護という目的達成のため、世俗君主たちとの交際は義務である、と主張している。

「Khwāja Ahrār の経済的役割」(pp. 17-20) では、Khwāja Ahrār は莫大な不動産を寄進財産とし、自らは管理人として運用したが、その拠点が、サマルカンド近郊の Muḥawwaṭa-yi mullāyān というハーンカーフ複合体であったこと、Khwāja Ahrār が購入したり彼に寄贈された不動産がしばしば旧所有者のもとに留まっており、彼らにとって Khwāja Ahrār の *ḥimāya* を得ることが目的であったこと、などが述べられている。

「宗派間交流 (interreligionism) とナクシュバンディーヤ」(pp. 20-22) では、Khwāja Ahrār が影響力をもっていた時期、サマルカンドのナクシュバンディーヤとヘラートのナクシュバンディーヤ、特にジャーミーやナヴァーイーとの間に密接な関係が確認され、ナヴァーイーには君主 Sulṭān Ḥusayn への取り次ぎを依頼していること、またこの頃、マールナフとホラーサーンの枠を超えて、Khwāja Ahrār の *murīd* や *khalīfa* が派遣されていること、などが述べられている。

「小結」(p. 22) においては、政権正当化の手段としてベルシア・イスラーム的理想を掲げたティムール朝にとって、ナクシュバンディーヤの主張するスンナ派的秩序は魅力的であり、また非中央集権的なティムール朝の政治システムが、Khwāja Ahrār のような政治的に如才なく権威あるシャイフの影響力増大を招いた、という見解を述べる。

以上に紹介した第1章の内容には、特に新たな指摘や見解は見られないが、H. Algar, O. D. Chekhovich, J. Paul, F. Meier, M. E. Subtelny, D. DeWeese らの研究成果を踏まえた、スタンダードな解説となっている。しかし、*Ahrārī* という語が、スーフィズムの系統を示すのではなく、*Ahrārī* period (p. 7), *Ahrārī* dynastic family (p. 18) などと不可解な

使われ方をしていたり、また、長くナクシュバンディーヤと同義に用いられたはずの *Khwājagān* という語から、*Khwājagānī* period (p. 10) なる表現が生じているのは問題である。さらに Mawlānā Ya'qūb Charkhi の没年の誤記 (p. 10) や *anjuman* の誤転写 (p. 15-14, l. 29) など、単純な誤りも含まれている。

II

序論第2章「ティムール朝末期におけるマーワランナフルとホラーサーンの歴史資料としての *Majmū'a-yi murāsālāt*」(pp. 23-56)

本章の目的は、章題の通り、MM 所収書簡の史料価値を明らかにすることであり、本書第2部に収められた書簡257通のうち、100通近くの内容が言及・引用されている。先に述べた通り、本書評では、これらの書簡について、第2部のペルシア語原文とその英訳をも検討する。また、特に興味深い書簡については部分的に訳出を試みる。

第1節「政治的領域」(pp. 24-36)

MM 所収書簡は多くの政治的問題に言及しているが、最も数が多く重要と思われるのが、紛争と和平、シャリーアと不信心者という、二つの二極的テーマである、と述べる。

「共倒れの紛争と和平調停政策」(pp. 24-31) の内容は以下の通り。ナクシュバンディーヤのシャイフたちは、一般ムスリムを守るため、ティムール朝の団結を維持し、紛争を可能な限り速やかに解決しようとした。Khwāja Aḥrār は書簡の中で、政治的問題に起因すると思われる混乱に言及しており、1471/72年バルフのハーキムが反乱を企てた際には、このハーキムがサマルカンド政権の支援を得たという噂を打ち消す書簡を送っている。その他の大部分の書簡がサマルカンド政権内の不和に関するものであるが、マーワランナフルとホラーサーンの緊張関係を裏付ける書簡も多く、Khwāja Aḥrār の書簡には緊張緩和の目的がうかがえる。ティムール朝王族のうち Khwāja Aḥrār を特に悩ませたのが Sultān Maḥmūd Mirzā であり、書簡の内容から、何度も忠告を行なったことがわかる。また Khwāja Aḥrār は、和平調停活動において、時として王族が気分を害するほどの無遠慮さを発揮し、領土分配に関してまで発言している。しかし、同時に自らの非礼を詫げる慎重さを持ち合わせていた。

以上のように、MM 所収書簡に基づく興味深い叙述が展開されているが、その中に、上述 Sultān Maḥmūd Mirzā とモグーリスターン（東チャガタイ・ハン国）の Sultān Maḥmūd Khān を混同するという大きな誤りが含まれているのは、非常に残念である。⁽⁷⁾ 本章の著者 Gross がこの時期の政治情勢に疎いことは、ほかの箇所からもうかがえる。

「シャリーアと不信心についての勧告」(pp. 31-36) では、まず、Khwāja Aḥrār とナ

クシュバンディーヤの著名シャイフたちがティムール朝支配の正当化に貢献したと推定し、当時 Khwāja Ahrār と並ぶスナ派の代表者、ジャーミーの活動に言及する。当時のヘラートは信仰に関して流動的な環境にあり、Khwāja Ahrār はナヴァーイーや君主 Sulṭān Ḥusayn に対して、シャリーア遵守、トルコ・モンゴルの伝統の廃止、信仰の敵と戦う義務を訴えている。信仰の部外者たち (bigānagān-i dīn) や東方の不信心者たち (kafara-yi sharqīya) と戦い、不信心者・罪人・放蕩者たち (kafara wa fasaqa wa fajara) を遠ざけるよう勧め、次のように、その模範を Sulṭān Abū Sa‘īd に求めている。

……今は亡き幸運なるスルターン陛下 [=Sulṭān Abū Sa‘īd] ……は部外者たちの幾つかの悪しき慣習 (sharr-i ba‘d rusūm-i bigānagān) をマールナフル地方から取り除かれた。陛下にも、貴き御心で、部外者たちの悪しき慣習をかの地方 [=ホラーサーン] から取り除くことに専心なさるよう…… (p. 35, pp. 113-115)

Khwāja Ahrār のこのような忠告は、ヘラートおよびホラーサーンの宗教情勢への不安をうかがわせる。彼は、ある書簡の中でヘラート滞在中の体験に触れ、「ヘラートにいたとき、何らかの地位に関わる人々の中に、この宗教 (millat) に関係がないばかりか、信仰 (dīn) と宗教を破滅させかねない歪んだ事柄を観察した」と述べている (p. 35, p. 187-189)。

以上に見た考察は重要なものであるが、不十分な点もあり、例えば、書簡中に「東方の不信心者たち」とあるにもかかわらず、信仰の敵の中にモグールが含まれることを見落⁽⁸⁾している。また、p. 32-1. 14 の traditionist は traditionalist の誤りであろう。

第2節「保護関係」(pp. 36-47)

本節の内容は以下の通り。書簡の内容によって、アム河を越えた人の移動が証明され、一部の人が、目的達成のため Khwāja Ahrār その他のシャイフたちに保護を求めたことがわかる。シャイフたちは「困窮する者たちに対する親切は偉大なるお方 [=神] のこの上ない望みである」(p. 37, pp. 292-293) という考えに基づいて、彼らの利益を守ろうとしており、Khwāja Ahrār は、ナヴァーイーにあてた書簡の中で、「Khwājagān の荷を自らに負い、自らをムスリムたちの福利に没頭させ、報奨としての恩恵によって榮譽を得るべきである」(p. 37, pp. 354-355)⁽⁹⁾と説いている。この種の書簡により、スーフィーの保護関係が、エリートをも含む地域社会ネットワークの広がりを、どの程度限定していたのかが明らかになる。Khwāja Ahrār の書簡45通を含む77通が一般的に依頼状であり、その大部分が、ヘラート宮廷を訪れる人々のための推薦状でもある。

「物質的援助」(pp. 38-41) ヘラートのシャイフたちの宮廷依存体質を嫌ったアフラルの書簡には、弟子や学生への援助に関するものは見られない。しかし、彼と最も近い人

々や Muḥammad b. Amīn al-Dīn (表中②の人物) その他が、宮廷に取り次ぐことで、学生、シャイフ、スーフィー共同体、ウラマーらの利益を守ろうとした。

「圧制や不正からの解放」(pp. 41-43) この種の書簡のほとんど全てが Muḥammad b. Amīn al-Dīn (表中②の人物) によるもので、財産や税に関する苦難を取り除こうとしている。書簡の多くが悲惨な経済状況を物語っており、住民が逃亡してしまった村の存在も確認される。また幾つかの書簡では不平の原因が過度の徴税にあると推察される。

なお、Gross は、これらの書簡が「Khwāja Aḥrār の指揮下」に書かれたと考えているが (p. 41)、そもそも、先に述べたように、この種の書簡の著者 Muḥammad b. Amīn al-Dīn と Khwāja Aḥrār との関係が不明である。軽率な判断と言える。

「旅・移住・血縁集団の再集結」(pp. 43-45) 40通の書簡が左記テーマに関するものである。Khwāja Aḥrār の書簡のうち18通が血縁集団の再集結の許可を要請している。Khwāja Aḥrār の用件でヘラートに行って留まっている者や、ヘラート宮廷に仕える者について、彼らの親族のため、マワランナフル帰還の許可を求める書簡も多い。また、Khwāja Aḥrār の書簡から、当時強制移住の慣行が存在したことが確認できる。このほかメッカ巡礼や留学、ヘラートでの治療の許可を要請する書簡がある。

「官職任命」(pp. 45-46) Muḥammad b. Amīn al-Dīn と Muḥammad Tabādkānī (表中②と⑥の人物) による計3通の書簡が、ヘラートとその近郊における、聖者廟の管理人、モスクのイマーム、同じくモスクのハティーブの任免に関するものである。

「‘Abd al-Awwal の一族」(pp. 46-47) Khwāja Aḥrār が自分の子供以上に愛していたとされる ‘Abd al-Awwal Nishāpūrī (表中③の人物) の、ホラーサーンにいた家族・親族のため、13通の書簡が書かれている。これらの書簡の著者は、‘Abd al-Awwal 自身を含めて、いずれも Khwāja Aḥrār と最も近い人々である。サマルカンドのナクシュバンディーヤ共同体の結束が、遠く離れた地域に住む親族にまで及んでいたことがわかる。

第3節「経済的領域」(pp. 47-56)

本節は既発表の Gross 2001 に基づいている。内容は以下の通り。

「交易」(pp. 48-49) 交易や商人に関する書簡が6通あり、うち3通が、Khwāja Aḥrār によるヘラートへの商品輸送に関するもので、例えば Khwāja ‘Alī (表中④の人物) は、「ホージャ猊下は手紙をしたため、ご自身の配下の Mawlānā ‘Abd al-Karīm に持たせてお送りになり、ホージャ猊下所有の数ハルヴァールの紙・胡麻・米・綿その他も一緒にお送りになった」と述べ、支援を要請している (p. 48, pp. 214-216)。交易に関する記事は聖者伝にも見られ、このような地域間交易の組織的枠組みは不明であるが、サマルカンドとヘラートのナクシュバンディーヤが商取引の手引きをしており、交易による地域間接触が

ナクシュバンディーヤの地理的拡張と一致している。

「徴税」(pp. 49-51) 伝記によれば, Khwāja Aḥrār は, しばしば都市住民の税を肩代りしている。税の軽減に関する書簡は9通あり, うち3通が Khwāja Aḥrār によるもので, 残り6通は Muḥammad b. Amin al-Din (表中②の人物) による。主に個人に課せられた税の免除が目的である。これらの書簡に基づいた税制の研究が Urunbaev 1995 である。

「財産と寄進財産」(pp. 51-55) Khwāja Aḥrār の書簡のうち5通が財産に関するもので, 配下の者や知己による, ホラーサーンにおける, 不動産売買, 財産の保護や奪還, および財産相続について, 支援を要請している。また6通の書簡が, 寄進財産の創設と管理に関する状況証拠となっており, ワクフ収益の分配, ワクフ財産の奪還, 王領地のワクフ化等について支援を要請している。Muḥammad Taqī al-Din (表中⑬の人物) による次の書簡は珍しいもので, 有名な聖者廟のワクフ文書の紛失を伝えている。

……最も良き人間 [=預言者ムハンマド] ……のおじの息子 Qutham ibn al-‘Abbās ……の廟 (mazār) [=サマルカンドのシャーヒ・ズィンダ廟]⁽¹⁰⁾ のワクフ文書 (waqf-nāma) は Khwāja ‘Anbar Kātib 所有の財庫にありましたが, 王権の館 [ヘラート] へと移送されてしまいました。寄進財産の一部は誰もが占有でき [る状況にあり], 収益の使用に関する寄進者の規定は一部が不明です。ご厚情賜わり, [この書簡の] 所持者によって届けられるようご尽力下さるなら…… (p. 55, pp. 216-218)

「小結」(pp. 55-56) MM 所収書簡は, ティムール朝社会における個人の意志・希望・欲求を明らかにしている。ホラーサーンとマーワランナフルの間を, 人・思想・商品・書物・財産・文書そして書簡が行き交った。これらの書簡によって, スーフィー・シャイフたちの宗教的・政治的・経済的役割の歴史的理解を増すことができる。

ここで, 第2章の内容を検討する過程で参照した, 本書第2部所載の書簡ペルシア語原文と英語訳注について, 気付いた点を指摘しておきたい。ペルシア語原文に関しては, 書簡外縁部の語句を慎重に本文に取り入れて逐一注記するなど, 水準の高い緻密な校訂を経ている。十分に信頼できるが, 技術的問題ゆえか時折りハムザの位置がおかしい (p. 148 : jur‘at ; p. 155 : ta‘id, ta‘khīr ; p. 217 : muta‘ahil ; p. 362 : ma‘lūfa ; etc.)。英語訳注はおおむね良好で, 第2章と同じ誤りを免れている場合もあるものの, 訳し落とし (p. 326, p. 366, p. 372, p. 403, etc. : 書簡冒頭の hū/ huwa ; 本稿注7ほか) やラテン文字転写の誤り (p. 294 : muta‘ādīān → muta‘adiyān ; p. 345 : ra‘iyati → ra‘iyati ; 本稿注10ほか) が散見される。また, 書簡を指す重要術語のうち, ruq‘a-yi niyāz を letter of supplication と訳すのは問題ないが, ‘arḍa-dāshṭ を petition と訳すのは必然性のない意識であ

り、字義通りの訳の方が良いであろう。さしあたって十分な訳注ではあるが、英語訳注の元になった Urunbaev によるロシア語訳注をも、直接参照できることが望ましい。

以上、本書第1部の内容を紹介し、第2部を含めての問題点を随時指摘した。本書の最大の欠点と言えるのは、先に述べたように、本書所載の書簡を Khwāja Aḥrār とその associate たちによるものと決めつけていることである。また、ティムール朝ヘラート宮廷との交渉を重視するあまり、ジャーミーを廷臣と位置づける誤りも犯している (p. 38, pp. 70-71)。さらに第1部には、上で指摘したもの以外にも、誤記や誤転写が見られ (p. 35-n. 33: 書簡番号誤記; p. 43-l. 9: 書簡番号未記入; p. 44-n. 59: 書簡番号重複; p. 44-n. 61: 二つの注の混合⁽¹²⁾; p. 46-n. 71: Khwāja Qāsim → Mawlānā Qāsim; p. 84: Naqī al-Dīn → Taqī al-Dīn; p. 88, p. 90: Muqārrib → Muqarrab; etc.), 加えて、書誌情報の誤りや (p. 2-n. 2: HS, vol. 2 → HS, vol. 4; 本稿注5; 本稿注6), 著者自らによる wāw の転写方式 (p. xv) の違反 (Mawlānā, Muḥawwaṭa, etc.) も散見され、利用に少なからぬ注意を要する。

しかしながら、第2部に収められた MM のテキストは、他に類を見ない貴重な史料であり、また、第1部はその解説および予備考察として十分に有用である。「書簡とその注釈が、前近代のマーワランナフルとホラーサーンの歴史、およびナクシュバンディーヤの役割に関して、新たな問題と議論を引き起こす」(p. xiii) という本書出版の目的は、後続の研究を待つまでもなく、既に達成されていると言っても過言ではない。

注

- (1) 評者自身、MM 所収のジャーミー自筆書簡に関して、研究成果を発表したことがある (1994年度東洋史研究会大会における口頭発表「ティムール朝末期の社会における神秘主義詩人ジャーミーの位置付け」[発表要旨]『東洋史研究』53/3 (1994), 201, および久保 1995 を参照)。
- (2) 最近の関連著作に、Urunbaev 1995 やウルンバーエフ 1997 がある。
- (3) この箇所を「集めた／集成した」という意味にしか解していないが (p. 59), 原文 *muraqqa' yasa-* は「継ぎ合わせる／貼り合わせる」の意である。
- (4) Urunbaev 1982 では「アルバムの研究」と次の「著者たち」の順番が逆である。
- (5) 1949年としているが (p. 66), 文献表にもある通り (p. 436), 1940年が正しい。
- (6) この論文は、本稿の文献表にある通り、英文で著されたものであるが、何故か本書中ではロシア文タイトルが示され、出版地も不正確である (p. 67-n. 43, p. 437)。
- (7) この誤りゆえの無頓着さか, Sulṭān Maḥmūd Mīrẓā に言及する書簡の英訳において, *Mīrẓā* という語を訳し落としている (p. 214)。
- (8) この書簡の引用部分末尾に注が付されているが、これは引用文中の *makhdūmzā-*

- das* に対する注であり、「東方の不信心者たち」への言及はない (p. 34)。ただし、第 2 部のこの書簡の訳注では正しく推定している (p. 142-n. 62)。また「信仰の部外者たち」について Gross は、「ウズベク、カザフほかのトルコ系部族民」と推定するだけで、ティムール朝史に大きな影響を与えたモグールに言及していない (p. 36)。
- (9) 訳出した箇所ではないが、この書簡の英訳において、従位接統詞 *chūnki* で導かれる節を、通常の先行部分の理由を示す用法とは異なり、後続する部分の理由と解しているが (p. 354)、評者は、その必要はないと考える。
- (10) この書簡の英訳において、‘*Anbar* を ‘*Anbār, az mawqūfāt* を *āz mawqūfāt* と誤転写し、しかも *mawqūfāt* を訳文中の the [properties] made vaqf の後ではなく、誤って the supervision の後に付記している (p. 217)。
- (11) 本稿注 8 に見られる例のほか、第 2 章で、非王族に冠された *amīrzāda* を prince と誤訳した箇所があるが (p. 44)、第 2 部の英訳では修正されている (p. 375)。また、「新しい大モスク [のハティーフ職] からの罷免」と解すべき部分を、第 2 章では誤解しているが (p. 46)、第 2 部では正しく英訳されている (p. 230)。
- (12) この注は、正しくは書簡番号のみで、後続の Sultān Murād に関する解説は、同頁 11-14 行への注であり、最初に書簡番号 nos. 496 (502), 541 (547) を補う必要もある。

参考文献

- Gross, J. 2001: “Naqshbandi Appeals to the Herat Court in the Late Timurid Period: A Preliminary Study of Trade and Property Issues,” in D. DeWeese (ed.), *Studies on Central Asian History in Honor of Yuri Bregel*, Bloomington, 113-128.
- Urunbaev, A. 1982: *Pis'ma-avtografy Abdurrahmana Djami iz “Al'boma Navoi,”* Tashkent.
- Urunbaev, A. 1995: “Pis'ma-avtografy iz *Al'boma Navoi*: Istochnik po izucheniiu nalogooblozheniia v Khorasane XV v.,” *Vostochnoe istoricheskoe istochnikovedenie i spetsial'nye istoricheskie distsipliny*, vyp. 3, Moscow, 121-157.
- Urunbaev, A. & L. Epifanova 1967: “The Letters of Abdarraḥman Jami as a Source of the Characteristics of the Poet's Personality,” *Jādnāma-ye Jan Rypka: Collection of Articles on Persian and Tajik Literature*, Prague/The Hague/Paris, 155-159.
- A. ウルンバーエフ 1997: 「15世紀マーワランナフルとホラーサーンの社会・政治状況におけるナクシュバンディズムの位置——『ナヴァーイー・アルバム』所収書簡に基づいて」久保一之 (訳) 『西南アジア研究』46, 60-69.
- 久保一之 1995: 「前近代中央アジアにおける宮廷社会と地域社会——ティムール朝期の神秘主義詩人ジャーミーの果たした役割」『三島海雲記念財団研究報告書』32, 127-129.